

北海道の 学校図書館

発行 北海道学校図書館協会
 会長 齋藤 昇一
 事務局長 黒澤 敏行
<http://sla.gr.jp/~hokkaido-sla/>
 印刷所 (株) 有 伸 商 会
 TEL (011)814-6211

平成28年度 青少年読書感想文全道コンクール 入賞者決定!!

今年も全道から、たくさんの素晴らしい作品が集まりました。第1次、第2次審査を経て、入賞者が決定しました。12月4日(日)に晴れの表彰式が行われます。入賞者の皆さん、おめでとうございます。

第62回 青少年読書感想文全道コンクール 第42回 北海道指定図書読書感想文コンクール

特別賞入賞者一覧

| | | |
|--|--|---|
| 北海道知事賞 | *ぼくと水たまり *「赤いペン」を読んで *『自然の無限と命の有限』 | 網走市南小 2年 田中 健翔 函館市桔梗中 2年 鳴海 清花 函館商業高 1年 高本 真生 |
| 北海道議会議長賞 | *「かえってきたまほうのじどうはんばいき」を読んで *『二日月』を読んで *土とともに生きる ・貧しさと豊かさ *ちゃんと走ること | 函館市旭岡小 2年 三村 真奈 留萌市東光小 4年 佐伯 愛花 札幌市藤野小 6年 伊田 紗雪 鹿部町鹿部中 3年 山口ひより 遺愛女子高 2年 岸本佳奈子 |
| 北海道教育委員会教育長賞 | *「新しいとびらをひらこう」 *希望のひまわり *明日のためにできること *本当の友達 ・為す処を知らざればなりー平和への想いー | 苫小牧市錦岡小 2年 河毛 優芽 室蘭市喜門岱小 4年 高澤真佑子 登別市富岸小 6年 上山 なな 藤女子中 1年 久保木真理 |
| 北海道学校図書館協会会長賞 | ・ちっちゃなゆうきはおおきな力 ・「ものも人も大切に」 ・生きる ・「レインツリーの国」を読んで ・「わたし」のやるべきこと | 函館稜北高 2年 中島 結 留萌市留萌小 1年 野々村玲風 音更町下土幌小 4年 村岡 倅 札幌市山の手小 5年 野崎 幸子 室蘭市翔陽中 1年 成田 梨菜 |
| 毎日新聞社賞 | ・ヘレン・ケラー ・緑を愛したケイトさん ・正解のない答え ・「真実に目を向けて」 ・「人間失格」になりたくない | 遺愛女子高 1年 館山 紋奈 函館市北美原小 2年 田中 綾乃 室蘭市本室蘭小 4年 高木 悠矢 釧路市愛国小 6年 古田 美羽 教育大附属函館中 3年 大山 芽依 |
| 北海道読書推進運動協議会長賞 | ・「しゅくだい」を読んで ・「ABC!曙第二中学校放送部」を読んで ・家族 ・想像すること | 旭川東高 1年 大川 真子 小樽市緑小 2年 池田 莉衣 函館市桔梗中 2年 鳴海 清花 岩見沢東高 1年 村山 睦 森町濁川小 5年 平田 麗雄 |
| 北海道青少年育成協会会長賞 | ・私のドリフターズ・リスト ・「ふつう」ということ ・永久の願い ・「ひみつのきもちぎんこう」を読んで | 滝川市明苑中 3年 高瀬 優衣 苫小牧市ウトナイ小 5年 久保 友櫻 札幌光星高 2年 根本 莉帆 苫小牧市苫小牧東小 2年 鈴木 福丸 |
| 北海道PTA連合会長賞 北海道高等学校PTA連合会長賞 北海道教育振興会長賞 | ・おじいちゃんへのプレゼント ・私のふるさと ・「生きる」を読んで ・私にとっての「あの日」 ・想いの櫛をゴールに ・倫理と文芸 ・「なんどもよみがえる紙」 ・「大津波のあとの生きものたち」を読んで | 苫小牧市ウトナイ小 3年 山内 颯大 森町濁川小 6年 鉢呂 佳菜 遺愛女子中 3年 二階堂ゆうな 帯広三条高 1年 三田 舞 登別明日中等教育 2年生 小林 拓暉 旭川東高 2年 山崎 祥誉 苫小牧市苫小牧東小 3年 齋藤 明莉 |
| はるにれ賞 教育出版社賞 文研出版社賞 北海道図書教材協会賞 図書館ネットワーク賞 北海道教育評論社賞 光陽社賞 | ・「心のたくましい人になる」 ・いのちのなみだ ・「生きる」 ・「おおきくなるっていうことは」 | 小樽市花園小 6年 柏木 碧海 苫小牧市苫小牧東小 2年 細井 新 室蘭市旭ヶ丘小 4年 櫻井 智里 北斗市萩野小 4年 村田ちひろ 室蘭市知利別小 6年 伏見 優花 室蘭市旭ヶ丘小 2年 菅原 京香 |
| 学校賞 | 小学校の部 中学校の部 高等学校の部 | 苫小牧市立苫小牧東小学校 遺愛女子中学校 北海道旭川東高等学校 |

*印は、全国コンクール応募北海道代表(自由・課題)作品です。

北海道知事賞

ぼくと水たまり

網走市立南小学校 2年 田中健翔

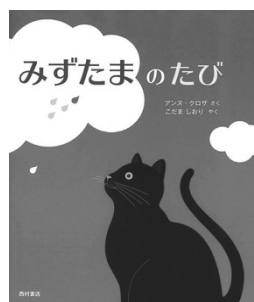
ぼくは、雨がふったあとの学校のグラウンドや近くの公園にできる水たまりをみつけるとバシャバシャといつも歩く。みずあそびは楽しい。でも水たまりは、「海になれなかった水」だと思う。水たまりは、いつも空をみている。青空になりたかったと思う。

だからほんやで「みずたまのたび」をみつけた時、みずたまもぼくとおなじようにたびをしようと思うとなんだかゆかいになった。

なぜなら、水たまりはどこにも行けないし、つまらないし何の役にも立てなくて悲しいと思いがらいつも空を見上げていると思っていたからだ。そして、太陽にてらされていつか消えてしまうまでただじっと空をみているだけだとも思っていたからだ。そんな水たまりをみてぼくは、いつも少しだけさびしい気持ちになった。ぼくもお母さんに「役立たず。」と言われて悲しくなる。だけどページをひらいたら、水は消えてなくなるのではなく、ちいさなちいさなつぶになって空にまいあがると書いてあったのでぼくはうれしくなった。ぼくがみていた水たまりも空にふわっとまい上がってたびにでるとわかった。いろんな形に姿をかえてみんなの役に立っているとわかった。葉っぱに

ついてたみずたまも、ぼくがみていた水たまりだったかとおもうとなんだかわくわくする。またページをめくると、ぼくの大好きな雪の結晶にもなれるとわかってうれしくなった。雪の結晶はとてもきれいな形をしているので特別な水だけがなれるものだとおもっていたからだ。そして、この本には、みずたまは「海の水にもなれる。」と書いてあってぼくは安心した。

この本を読むまでは、ぼくは、水たまりは「海になれなかった水」だと思っていた。でも今は、水たまりもいろんな形に姿をかえることができるようになった。つぎに水たまりをみつけたらやっぱりバシャバシャと歩く。だけどさびしい気持ちはもうない。今度はどこにたびをしてきたか聞いてみようと思う。



アンヌ・クロザ 著
『みずたまのたび』
(西村書店)



総 評

審査委員長 三浦 正志 (札幌市立前田中学校長)

本年度の第62回青少年読書感想文全道コンクール、第42回北海道指定図書読書感想文コンクールには、全道で660点も作品が寄せられました。各支部で厳正に審査され選抜された作品が揃いました。子どもたちが読書を通して自分を見つめなおし、素直に感動を表現することができた作品ばかりでした。応募してくれた児童生徒のみなさん、指導に当たられた先生方、子どもたちにさまざまな示唆を与えてくださった保護者の方々に感謝申し上げます。総勢25名の審査員が5部門に分かれて最終審査を行いました。本年度も熱心な話し合いのもと厳正に審査を行いました。たいへん時間がかかりました。

小学校低学年の作品では、自分だけでなく家族のことなどにも触れ、感動をととても素直な気持ちで表現していると感じました。中学年の作品では、その本の主題にそって内容を読み取り、自分の思いをしっかりと表現している作品が多かったです。高学年の作品では、登場人物の思いや行動が自分自身の経験と重なり、より深く作品世界を体験する感想文となっていました。中学生の作品では、読後の感動から自分の考えを広げ、そして変えることができたことを、表現を工夫しながら率直に伝えていると感じました。高校生の作品では、その本の内容と自分自身の体験を重ね合わせるばかりでなく、自分理解が深まると同時にこれからの自分の生き方を考え、豊かな言葉を使って巧みに表現している感想文が多かったです。

多くの本を読み、知的好奇心を満足させたり、豊かな感性を身につけていくことはとても大切なことです。読書を通して、本に親しみ、考え、感動したことなどを言葉で表現する、それが読書感想文だと思います。これからも多くの児童生徒のみなさんにとって読書を豊かなものにするためにこのコンクールがきっかけとなってくれればと願っています。

北海道知事賞

「赤いペン」を読んで

函館市立桔梗中学校 2年 鳴海清花

都市伝説。真実なのか嘘なのか、分からない不思議な話に、興味をそそられる人は、少なくないだろう。私もその一人だ。この物語の主演となる“赤いペン”の噂の始まりはとてつととするものだった。手がペンに張り付き、無理に文字を書かせ持ち主の血を吸って生き延び、その血でペンは赤くなる・・・あまりの気味の悪さに、怖い話が好きな私でさえ、関わりたくないと思った。そんな“恐怖の赤いペン”を中学生の女の子、夏野は、調査し、様々な人の力を借り、最終的にその秘密にたどり着いていった。

引っ込み思案の夏野を助けてくれる、明るく社交的な、同級生の男の子、春山。文学館にいる大人達。私は最初、大人までもが何故、この不思議な話を一緒に調べてくれるのか疑問だった。そんな思いで読み始めたが、読み進めるうちに、赤いペンを必ず探し出して欲しいと願っている私があった。自分の心の変化に驚いた。それほど、赤いペンの物語は魅力に溢れていたのだ。

赤いペンが歩んだ道を辿る、夏野と春山。その中で、ペンを必要としている人の前に、落とし物という形で現れ、その人の問題を解決し、いつのまにか消える。というパターンを見つける。赤いペンを手にした人達は、過去の楽しい思い出や、辛いけど向き合うべき現実など、ペンが書く言葉を通して、今を受け止め、未来の道しるべになるヒントを、もらっているのだと、私は思った。だから赤いペンを手にした人達は、感謝の気持ちを持っていた。同級生が話していた、怖い噂は間違っていたのだ。人の噂話とは、適当に語られるものも多い。悪い方に伝えられていた噂に“赤いペン”が、とても気の毒に思えた。ペンに幸せにしてもらってきた人達も、そう思い、悲しいと感じただろう。様々な人に出会う中で夏野は、「赤いペンの物語は、話を待っている人達の栄養になっている。」と、ペンの持つ不思議な力を感じていた。

様々なお話の中で、私ならどんな“心の栄養”が欲しいだろうと、過去を振り返った。中学校へ入学した時に「今までの努力は無駄にはならないから、自信を持ちなさい。」という言葉がもらえたら、どんなに嬉しいだろうと思った。小学生の頃の私は、自分に自信がなく、そんな自分を変えたくて、学校生活の様々な場面で、努力を続けた。結果を残せたものもあり、これからは大丈夫と、少しの自信を持ち、中学校へ入学した。しかし、私の心はまた不安な色に染められていった。今まで積み上げたものが消えてしまい、また一から始まるという感覚におそわれたのだ。新しい出会いへの緊張感。優れている人を目の前にし、自分には何が出来るのだろうと、また自信を失ってしまった。そんな気持ちから救ってくれ

たのは、先生だった。家庭学習ノートに書いてくれる、先生の言葉が楽しみで、毎日ノートを提出したいと思った。先生に信頼してもらえる事で、心が強くいられるようになった。一年生最後のページに書いてもらった、先生からの言葉を今でも見返している。一生忘れられない言葉として、永遠に私の心に残るだろう。結果にこだわる事も大事だが、人に信頼してもらえる事が、何よりも幸せな事なのだと、私は思った。大切な事を言葉を通して、先生に気づかせてもらったのだ。その時の思いを胸に過ごしている今、入学した頃とは比べられないくらい、学校が楽しくなった。信頼されていた安心感は、今も私の勇気の源だ。人との出会い、言葉が持つ力の偉大さ。赤いペンの魅力に惹きつけられるみんなの気持ちが、私にもよくわかった。

赤いペンを一緒に探してくれた大人達。去年、亡くなってしまった夏野のおばあちゃん“片桐筆”が赤いペンで書いていた物語のファンだった。みんなその素敵な物語を、より多くの人達に知ってもらいたいと願っていた。最後には、みんなの夢が現実のものとなった。これもすべて赤いペンの持つ力なのだろう。

私の成長、思い出にはいつも物語がある。幼い頃、両親に読み聞かせてもらった本。大好きな絵が書かれている絵本。写真よりも、本を見た方が、その頃の記憶が鮮明に蘇る。毎年、読書感想文を書く事で、自分に起きた事を振り返る。悩んでいた事、苦しかった事、そしてそれを乗り越え、これからどうやって生きるのかの決意が、そこにはある。物語には、私が生きてきた歴史が、沢山つまっている。

片桐筆は、亡くなった後も、沢山の人の心に愛され続けた。多くの人の心に、今も生き続けている。なんて素敵な物語なのだろう。

私はいつか、大好きな絵と、自分の思いをつめこんだ絵本を描いていきたい、という夢を持っている。誰かの記憶に残れる人間になりたい。片桐筆のように、素敵に輝きたい。

これから先も、様々な経験で、私の物語のページが増えていく。また壁にぶち当たる日も来るだろう。そんな未来の私にかけられる言葉。大丈夫だから、自分を信じて突き進むんだ！！



澤田 美穂 著
『赤いペン』
(文学の森)

北海道知事賞

『自然の無限と命の有限』

北海道函館商業高等学校 1年 高本真生

中学三年の英語の教科書に、写真家である星野道夫さんについての英文が載っていた。楽しげなホッキョクグマやアザラシの親子の写真が見たくて、今でもその教科書を開くことがある。なんだか温かい気持ちになるのだ。

「今ここにいたらいいのになと、新しい風景に出会うたびに思います。」

私が星野さんと同じように思った出来事がある。三月のある日、私は初めてホタテの水揚げ作業の手伝いをした。三月といっても朝方は氷点下にもなり、吐く息も白い。ベルトコンベアに流れてくるホタテの中から、殻だけの物、貝が割れて売り物にならない物を選ぶだけの簡単な作業だ。寒いし眠いしで、早く帰りたいなという思いでやっていた。イヤイヤながらも仕事をしていると、東の空が段々と明るくなっていくのがわかった。海から朝日が昇り、ゆっくりと夜が明けていく様子を見たのは生まれて初めてだった。素直に地球の息吹を感じると共に、両親に対して「ずるい」という感情が湧いた。「今まで、私が寝ている間にこんなにいい景色を見ていたなんて。」仕事の達成感よりもその感情が前に出た。常日頃から母は忙しいながらも、沖からの景色や父の作業姿の写真をを見せてくれる。しかし、自分の目で見た景色は写真とはぜんぜん違うリアルタイムで見る夜明け。橙と青のグラデーションの空は、星野さんの見たルース氷河のゆらめくオーロラと重なり、なんだか得した気持ちになった。宇宙と対話できる不思議な空間。暗黒の空を生き物のように舞う冷たい炎。素晴らしい表現力には脱帽だ。昼夜問わず働く両親にとって癒しとなっていただろうこの景色は、一生懸命働いたからこそのご褒美なのだと思う。「妹もここにいれば、この景色が見られたのに。」

本の中に写真は一枚もないが、読みながらアラスカの雄大な厳しくも美しい自然が目飛び込んでくる。読めば読むほど星野さんが紡ぐ詩のような言葉の世界にのめり込んだ。ただ、私の語彙力が乏しいことにも気付かされ、辞書を片手に読み進んでいった。

「東京であわただしく働いている時、その同じ瞬間、もしかするとアラスカの海でクジラが飛び上がっているかもしれない。」

当たり前だけど、知ることがなかった命に衝撃を受けた。ハッとさせられた。今、私がいるこの狭い社会や空間が世界の全てだと思っていたから。時間とは不思議だ。日常とは別に壮大でゆったりとした時間が確実に流れていて、私もその一部なのだ。心の片隅にそのことを意識できるかどうかは天と地の差ほど大きい。時間に追われ、小さなことにうじうじ悩み、後悔ばかりしている自分は、

なんてちっぽけな人間なのだろう。旅行で行っただけの都会の人ごみの中にいるだけで、自分の小ささを痛感した。星野さんの言葉がそんな私の視野を広げてくれた。今、目の前にある一瞬だけを費やす充実感を与えてくれた。

この夏休み、母と妹と三人でペルセウス座流星群を見ようと家の裏の海岸に寝そべった。アラスカの夜空ではなぜかオリオン座が大きく見えると言う。そのアラスカの空とこの空はつながっているんだと思うと、世界の広さを身近に感じる事ができてうれしかった。物があふれる世の中に生きている私たちが、忘れてしまっていた何もないことの豊かさと想像力を取り戻す事ができた。日中だと地平線の向こうには室蘭が見える。外灯はないが、月明かりがあった。それでも流れ星をいくつも見る事ができた。こんなに近く場所で、星を見るためだけに時間を過ごすのは三人とも初めてだということに驚いた。いつも見ている海。仕事で沖から眺めることが多い父も、今度流星群がきた時には、是非誘おうと思った。海の静けさと満点の星空は、日日の仕事や生活の疲れを取り除いてくれるだろう。その前に父にもこの本を読んでもらいたい。ただ空を眺めることより、読むことで手が届きそうなどころにある宇宙の神秘さを知ることができるから。私がそうだったから。

日々生きているということは、当たり前のことではなく、実は奇跡的なことだという。しかし、生命の奥底にはもろさがあると。星野さんは四十三歳の若さで、ヒグマの襲撃によって命を絶たれる。今年がその没後二十年にあたる。本には、その約二年前に生まれてきた我が子への思いを綴っているのがなんとも悲しくて涙が出た。まだまだ息子との時間を過ごしたかったはずだ。自然の無限と命の有限をまざまざと思い知らされた。

限りある命を前に、今私ができること。星野さんのようにカメラを片手にアラスカへ行くという勇気はないが、写真を取ることはできる。写真部に入ったことも、この本に出会う何かの縁だったのかもしれない。はるかな地球の自然のほんの一部でもいいからたくさん写真を撮り、その中の一枚でも人の心を豊かにし、感動させることができればと思う。私が今生きていられることに感謝して。



星野 道夫 著
『旅をする木』
(文藝春秋)

北海道議会議長賞

『二日月』を読んで

留萌市立東光小学校 4年 佐伯愛花

私は、二千三百二十四グラムで生まれた。小さい赤ちゃんだった。すぐに体温が下がるので、一週間、保育器の中で過ごした。おっぱいも上手に飲めず、母がしぼってくれた母乳をほ乳びんで飲んで大きくなった。もしかしたら、私にも障がいが残っていたかもしれない。いろいろな苦勞があった中で育ててくれて、ありがたいと思う。

主人公の杏は、私と同じ四年生。障がいをもって生まれた妹の芽生は小さな小さな赤ちゃん。一才でも歩けないし、立てないし、ハイハイもお座りもできない。そういうことができるようになるかもわからない。だけど芽生は杏の側にいる。杏も芽生の側にいる。読み進めるうち、杏の気持ちにも芽生の気持ちにもなって、私は泣いていた。妹はかわいいけれど、友達に見られるのは嫌だという気持ち。母にもっと自分を見てほしいという気持ち。胸がギュッとなるほど、杏の切ない気持ちが伝わってきた。

私にも年子の弟がいる。たった一才しか違わないのに、「お姉ちゃんだから」と、がまんすることが多い。いつも、「私がしっかりしなきゃ」と考えることが多い。弟のことを嫌いではないけれど、父も母も一番手をかけているのが弟だと思う。私は、時々おもしろくない気持ちになる。「いい子ちゃん」でいる自分に疲れることがある。

きっと、杏も頭ではわかっているけれど、自分の気持ちが自分の思い通りにならなくて、泣いたのだと思う。「いい子ちゃん」でいること、特に『障がい』を前にすると、「障がいがある人が優先になり、不満があっても言ってはならない」、そんなルールにしばられて、素直

になれなかったのだと思う。でも、ありのままの自分に向き合う強さが、杏の強さだとも思う。杏の気持ちの変化を読みながら、「もっと甘えたい、もっとわがママを言いたい」と思うのが、私だけではないとわかり、ほっとした。そして、「心がゆれてしまうのは、弱いこと？ いけないこと？」と私も自分に問いかけてみた。

もし、変えられない現実に関自分が直面したら、それを受け入れるのはとてもつらいと思う。でも、自分をかわいそうに思ったり、嫌がったり、怒ったり、人のせいにするのではなく、「そうだよ。それがどうしたの？」と思えたら、もっと自分を好きになれて、もっと幸せになれるような気がする。

四年生の私は、嫌な自分が出てきて、おさえられない時がある。弟と勝負ごとで負けると腹が立って顔が恐くなる。でも、それでいい。私の心も月のように、満ちて欠けて姿を消してまた現れる。それをくり返していく。

私にもわがママを言っても受け止めてくれる両親がいる。小さく産まれた私をここまで大きく育ててくれた両親がいる。家族に守られながら成長している杏の様に、私も少しずつ強く、思いやりをもてるようになりたい。そして、今の自分をもっと好きになりたい。



いとう みく 著

『二日月』

(そうえん社)

北海道議会議長賞**土とともに生きる**

札幌市立藤野小学校 6年 伊田 紗雪

「一土になる」という言葉の意味。それは、生き物の命が土に還ること。この言葉は、集落に残る樹齢五百年以上といわれる、『田口の大イチョウ』の根のように、深く重たい。

尾方茂さん・チユキさんは私の祖父母によく似ていて、昭和初期に生まれ、農家だった夫婦だ。私の祖父は昭和二年に、ここ札幌の藤野で生まれ、私が生まれる八年前に土に還った。祖母は六十年前におよめに来て、祖父と一緒に何十年も畑仕事をしてきた人だ。父もここで生まれ育ち、私たち三人きょうだいも、土のおいを感じながら育ってきた。

茂さんとチユキさんの手は、祖母の手に良く似ている。太く節くれだってしわしわで、土の色がしみこんだ、働き者の手だ。私は、祖母と畑に行くことが大好きだった。季節ごとの野菜を採り、さくらんぼの種を飛ばした。祖母からは土と太陽のにおいがした。茂さんとチユキさんも同じにおいがするのだろう。

自然に囲まれた、祖母と両親と私たちきょうだいの暮らしは、ずっと続くと思っていた。しかし、姉は東京の大学に進学し、兄も道外への進学を目指している。そして、私たちを畑に連れて行き、かわいがってくれた祖母の世話を、今は私がしている。家族の姿がこんなに変わるなんて、思いもしなかった。

祖母は三年ほど前から、足腰の自由が利かなくなってしまう。弱った足でこっそり畑に行き、転んでいるところを発見されたことが何度もあった。今は、家から出ることもできなくなり、窓辺から畑をながめるだけだ。

茂さんとチユキさんが、もう作物を作っていない畑で、

小石を拾い、草むしりをする写真に、かつての祖母の姿が重なって見える。「石がなければすぐに種を蒔くことができる。」と言う茂さんとチユキさんは、だれにこの大地をつないでいこうとしているのだろうか。

ダムの底にしずむはずだった村。いや、ダムになる役目を果たせずに放置された村。集落には二人以外だれもいない。これからだれかが住むとも思えない。だけど、茂さんとチユキさんは、自分たちが土に還る一土になる一まで、この土地を守っていくのだろう。

我が家の、手入れが行き届かずにあれ果てた畑。しかし、私も共働きの両親もそこから目をそらしてきた。祖母は、毎日どんな思いでこの畑をながめているのだろうか。祖母に対する申し訳ない気持ちちがわき起こってきた。

北海道は歴史の新しい土地だ。祖父は曾祖父たちと一緒に、子どもの頃から未開の土地を開拓したそうだ。山に分け入り木を切り出し、馬を飼い畑を耕した。我が家には、『田口の大イチョウ』のような、五百年以上も人々の暮らしを見守ってきた大木はない。だが、百年の大地の歴史があることに気付いた。

この本を読んで教えられた。一土になる一とは、土に還ることだけではない。土とともに生きることなのだ。私も、愛する大地にしっかりと深く根を張り、命をつないでいこう。祖父母のように、尾方さん夫婦のように。



大西 暢夫 著

『ここで土になる』

第42回 平成28年度 青少年読書感想文全道コンクール

北海道指定図書

北海道の先生がおすすめする本

小学校低学年の部



カボチャのなかにたねいくつ?
 マーガレット・マクナ马拉/作
 G.ブライアン・カラス/絵 真木文絵/訳
 フレーベル館 定価1,300円+税
 教室に置かれた大中小のカボチャ。たねがいくつあるか調べてみることに。予想と観察に基づく実践授業が始まります!

ドングリ・ドングラ



コマヤスカン/作
 くもん出版
 定価1,200円+税
 海の方こうの火の焔めざし、ドングリたちは旅に出た。冬を越え、海を渡り、進む彼らの目的は…。勇氣と希望の物語。



みずたまのたび
 アンヌ・クロザ/作 こだましおり/訳
 西村書店 定価1,300円+税
 さまざまなかたちに姿をかえ、いろいろな生き物に出会いながら地球をめぐる「みずたま」の冒険!美しいイラストの科学絵本。



ちっちゃなサリーはみていたよ
 ジャスティン・ロバーツ/文 クリスチャン・ロビンソン/絵
 中井はるの/訳 岩崎書店 定価1,400円+税
 一ひとりでも ゆうきを だせたならー
 一番小さいサリー。友達がいじめられ心を痛めますが、周りは無関心。本当にそれでいいの? サリーは立ち上がりま

小学校中学年の部

ノックノック ~みらいをひらくドア~



ダニエル・ビーティー/文
 ブライアン・コリアー/絵
 さくまゆみこ/訳
 光村教育図書
 定価1,400円+税
 大好きなパパがいなくなった。ぼくにはまだ教えてもらってないことがたくさんある。やがてパパから手紙がとどきー。

ぞうのなみだ ひとのなみだ



藤原幸一/著
 アリス館
 定価1,400円+税
 ぞうのポロンはお母さんといつもいっしょ。森のおくの田んぼで、稲を食べたお母さんは人間にうたれ…。親子の愛を描く。

お昼の放送の時間です



乗松葉子/作
 宮尾和孝/絵
 ポプラ社
 定価1,200円+税
 放送委員になれたのに、ペアの子のせいで意気消沈のかえで。交わらないかと思われた女子と男子のまぶしすぎる交差!

小学校高学年の部

生きる 劉連仁の物語



森越智子/作
 谷口広樹/絵
 童心社
 定価1,600円+税
 1944年9月、日本軍により中国から連れ去られた劉連仁。過酷な炭鉱労働から逃亡し北海道の山中で一人生き抜いた真実の物語。

大津波のあとの生きものたち



永嶋嘉之/写真・文
 少年写真新聞社
 定価1,400円+税
 大津波に流された生きものたちはどのように復活し、なぜ消えたのか?被災した海岸の生物を追い続けた写真絵本。

イスタンブルで猫さがし



新藤悦子/作
 丹地陽子/絵
 ポプラ社
 定価1,300円+税
 トルコの美しいワン猫に会いたいという口実で、教室から逃げるようにして、父の赴任先のイスタンブルにやってきた愛は…?

中学生の部

コービーの海



パン・マイケルセン/作
 代田亜香子/訳
 鈴木出版
 定価1,600円+税
 座礁したクジラの親子を助けた義定の少女コービー。事故で片足を失い、とまっていたと想っていた人生が、また動きはじめる。

赤いペン



澤井美穂/作
 中島梨絵/絵
 フレーベル館
 定価1,400円+税
 人から人へと渡り歩く「赤いペン」の噂を追う、中学生の夏野。ペンが通り過ぎた5つのお話と人間模様を描く。

感想文は夏休み明けに、学校に出してください。詳しくは、「応募のきまり」をご覧ください。

●ホームページ

北海道学校図書館協会 検索

北海道の本を読みましよう!

第62回 青少年読書感想文全道コンクール
第42回 北海道指定図書読書感想文コンクール

■主催/北海道学校図書館協会・毎日新聞社北海道支社 ■後援/北海道・北海道議会・北海道教育委員会・公益財団法人北海道青少年育成協会 ■選定協力/北海道読書推進運動協議会

優 秀 賞

小学校（低学年）の部（12名）

| 作 品 名 | 氏 名 | 学 校 名 | 学年 |
|-----------------------|---------|-----------|----|
| ・ぼくにできること | 朝 倉 誠 貴 | 函館市港小 | 2年 |
| ・「うまれてきてくれてありがとう」をよんで | 市 川 梨 心 | 留萌市緑丘小 | 1年 |
| ・たんじょう日おめでとう！ | 小 泉 ゆ う | 室蘭市地球岬小 | 2年 |
| ・いのちをくれてありがとう | 竹 野 琥 珀 | 室蘭市地球岬小 | 1年 |
| ・ほんとうのきもち | 井 上 裕 太 | 室蘭市八丁平小 | 2年 |
| ・「わたしのコインは何色？」 | 大 森 花 音 | 赤平市豊里小 | 2年 |
| ・ボタンちゃん | 秋 本 優 華 | 室蘭市海陽小 | 2年 |
| ・「ひみつのきもちぎんこう」をよんで | 吉 田 昂 良 | 教育大附属函館小 | 2年 |
| ・サリーはつよいおんなのこ | 中 川 智咲子 | 士別市士別小 | 1年 |
| ・ちっちゃなサリーはみていたよを読んで | 大久保 帆乃佳 | 士幌町士幌小 | 2年 |
| ・「だれかのために」 | 工 藤 大 誠 | 旭川市陵雲小 | 2年 |
| ・たいせつなみずたま | 竹 田 雅 | 札幌市もみじの森小 | 1年 |

小学校（中学年）の部（12名）

| 作 品 名 | 氏 名 | 学 校 名 | 学年 |
|------------------------------|---------|-----------|----|
| ・「命といのち」 大津波のあとの生き物たち | 小 野 琉 峯 | 函館市北美原小 | 4年 |
| ・しっぽをなくしたイルカ おきなわ美ら海水族館フジの物語 | 渡 辺 愛 子 | 苫小牧市苫小牧東小 | 4年 |
| ・「ココロ屋」に出会って | 能 理彩子 | 札幌市日新小 | 3年 |
| ・“いのち”のすくいかたを読んで | 民 谷 優美香 | 函館市中央小 | 3年 |
| ・「いつか」 | 山 口 美 咲 | 室蘭市喜門岱小 | 4年 |
| ・「さかさ町」を読んで | 林 澄美麗 | 岩見沢市第一小 | 3年 |
| ・ごみ箱行きではない道を | 竹 野 妃 穂 | 室蘭市地球岬小 | 4年 |
| ・「二日月」を読んで | 小 山 凜太郎 | 留萌市留萌小 | 4年 |
| ・男同士のやくそく | 村 田 清之介 | 北斗市萩野小 | 3年 |
| ・「ぞうのなみだひとのなみだ」を読んで | 君 羅 妃 保 | 旭川市永山西小 | 3年 |
| ・「お昼の放送の時間です」を読んで | 及 川 叶 愛 | 室蘭市八丁平小 | 4年 |
| ・仲良くなるために | 塩 見 苺 愛 | 函館市東山小 | 4年 |

小学校（高学年）の部（12名）

| 作 品 名 | 氏 名 | 学 校 名 | 学年 |
|----------------------------|---------|---------|----|
| ・忘れてはいけないこと～16歳の語り部～ | 秋 本 萌々花 | 函館市深堀小 | 6年 |
| ・二十一世紀に生きる僕 | 大 隅 透 | 函館市深堀小 | 5年 |
| ・ローズが教えてくれた大切なこと | 田 中 飛 鳥 | 網走市南小 | 6年 |
| ・てんからどどんを読んで | 成 澤 綸 | 知内町涌元小 | 5年 |
| ・「茶畑のジャヤ」に出会って | 藤 元 空 | 函館市本通小 | 5年 |
| ・違いを見つめて | 齊 藤 心 音 | 室蘭市旭ヶ丘小 | 6年 |
| ・「大村智ものがたり」を読んで | 品 川 咲 季 | 小樽市花園小 | 6年 |
| ・ふるさとへの想い | 鈴 木 詠 美 | 室蘭市海陽小 | 6年 |
| ・大津波のあとの生き物たち～共に生きる未来のために～ | 佐々木 扶 | 室蘭市八丁平小 | 6年 |
| ・「大津波のあとの生き物たち」を読んで | 北 村 賢 汰 | 函館市えさん小 | 5年 |
| ・「イスタンブルで猫さがし」を読んで | 安 齋 萌 花 | 幕別町札内南小 | 6年 |
| ・「生きる」の答え | 櫻 井 壮二郎 | 旭川市東町小 | 6年 |

優 秀 賞

中学校の部 (15名)

| 作 品 名 | 氏 名 | 学 校 名 | 学年 |
|---------------------------------------|---------|---------|----|
| ・平和を祈り差別をなくす | 村 上 紗 可 | 遺愛女子中 | 1年 |
| ・勇気の一步 | 松 尾 里 咲 | 岩見沢市光陵中 | 2年 |
| ・『生きる：劉連仁の物語』を読んで | 羽 毛 美 咲 | 苫小牧市凌雲中 | 1年 |
| ・「世界の家族の一員として」 | 松 井 佳 映 | 旭川市江丹別中 | 2年 |
| ・「才能」とは大好きだということ-「羊と鋼の森」から力をもらって- | 村 上 芽 未 | 小樽市松ヶ枝中 | 3年 |
| ・「いのちの大切さ」 | 新 井 真 帆 | 羽幌町羽幌中 | 3年 |
| ・「いま、良ければいい」はダメ | 植 村 優 希 | 鹿部町鹿部中 | 3年 |
| ・『『のび太』という生きかた』を読んで | 宮 本 和 奏 | 砂川市砂川中 | 2年 |
| ・『夜間中学へようこそ』から得たもの | 水 野 愛 美 | 札幌市伏見中 | 1年 |
| ・自分を信じて | 太田口 ゆ ず | 岩見沢市緑中 | 1年 |
| ・「君の臍臓をたべたい」を読んで | 児 玉 愛 実 | 旭川市東光中 | 3年 |
| ・「赤いペン」を読んで | 中 野 紗 希 | 旭川市永山南中 | 3年 |
| ・ホームレスは怖い?汚い?それは偏見-『ホームレスさんこんにちは』を読んで | 澤 本 佳 奈 | 小樽市松ヶ枝中 | 3年 |
| ・私はロケット、飛び立て私 | 畠 山 日 菜 | 札幌市向陵中 | 2年 |
| ・この本に気付かされた事~世界から猫が消えたなら~ | 岩 本 伊 織 | 小樽市西陵中 | 2年 |

高等学校の部 (12名)

| 作 品 名 | 氏 名 | 学 校 名 | 学年 |
|--------------------|---------|--------|----|
| ・時間を生きる | 有 村 あかり | 岩見沢東高 | 1年 |
| ・希望探しの旅 | 川内谷 春 妃 | 室蘭清水丘高 | 2年 |
| ・勝つということ | 小 倉 萌 花 | 札幌旭丘高 | 1年 |
| ・人情と現代 | 橋 本 枇菜乃 | 札幌光星高 | 2年 |
| ・人間とは、生きるとは | 天 坂 真 子 | 函館西高 | 3年 |
| ・生きる希望 | 貴田岡 結 衣 | 旭川東高 | 2年 |
| ・私の責任 | 山 川 ちひろ | 旭川藤女子高 | 2年 |
| ・強い自分に | 山 崎 瑞 季 | 帯広南商業高 | 2年 |
| ・君の臍臓をたべたいを読んで | 松 久 桃 華 | 帯広緑陽高 | 3年 |
| ・「タスキメン」を読んで | 荒 井 愛 海 | 岩見沢東高 | 1年 |
| ・歓喜の世界 | 出 町 愛 実 | 旭川西高 | 2年 |
| ・「シンドラに救われた少年」を読んで | 上 山 佑季奈 | 帯広柏葉高 | 2年 |

◆感想文集『北海道の読書』(平成28年度版)の普及を

第62回青少年読書感想文全道コンクール入賞作品集

○小学校版 (1,000円)

特別・優秀・優良 入賞者全作品を掲載

○中学校・高等学校版 (1,000円)

特別・優秀・優良 入賞者全作品を掲載

【申し込み・問い合わせ先】

北海道学校図書館協会HP > 読書感想文コンクール > 北海道の読書 > 学校宛・個人

札幌市立西岡南小学校 教諭 佐藤秀則 FAX 011-582-1590

優良賞

小学校(低学年)の部

| | | |
|-----------|----|--------|
| 森町さわら小 | 2年 | 小島 璃子 |
| 函館市北美原小 | 2年 | 常野 愛梨 |
| 岩見沢市第一小 | 2年 | 松井 優奈 |
| 室蘭市喜門岱小 | 1年 | 高澤真 椋子 |
| 苫小牧市苫小牧東小 | 2年 | 渡辺 愛望 |
| 岩見沢市第一小 | 1年 | 小林 弘人 |
| 月形町月形小 | 2年 | 新道 帆南 |
| 月形町月形小 | 2年 | 伊藤 權 |
| 旭川市春光小 | 2年 | 笠原 吹 |
| 苫小牧市明德小 | 1年 | 山水 恋和 |
| 岩見沢市栗沢小 | 2年 | 本田 優芽 |
| 音更町木野東小 | 2年 | 清水 陸叶 |
| 北斗市萩野小 | 2年 | 坂田 莉那 |
| 帯広市西小 | 2年 | 西村 太成 |
| 旭川市緑が丘小 | 1年 | 池内 奏心 |
| 室蘭市八丁平小 | 2年 | 岡野 衣吹 |
| 森町駒ヶ岳小 | 2年 | 竹田 楓瓦 |
| 岩見沢市中央小 | 1年 | 馬場 心希 |
| 室蘭市八丁平小 | 1年 | 滝野沢 紗空 |
| 森町駒ヶ岳小 | 2年 | 池田 詞華 |
| 岩見沢市栗沢小 | 2年 | 坂野 柊馬 |

小学校(中学年)の部

| | | |
|---------|----|--------|
| 函館市北美原小 | 4年 | 祐川あかり |
| 小平町小平小 | 4年 | 堺田 莉央 |
| 小樽市花園小 | 3年 | 長谷川このは |
| 室蘭市旭ヶ丘小 | 4年 | 齊藤 縁 |
| 函館市深堀小 | 4年 | 細谷 琴音 |
| 増毛町増毛小 | 4年 | 高橋 愛子 |
| 岩見沢市南小 | 3年 | 岩山 旭飛 |
| 美幌町東陽小 | 4年 | 野崎愛加利 |
| 函館市弥生小 | 3年 | 竹崎 泰史 |
| 小樽市潮見台小 | 4年 | 澤田 実典 |
| 留萌市緑丘小 | 3年 | 小川 絢世 |
| 北斗市谷川小 | 4年 | 川井 悠暖 |

| | | |
|-----------|----|-------|
| 上土幌町糠平小 | 3年 | 伊東 海里 |
| 滝川市西小 | 4年 | 吉川 寧音 |
| 札幌市桑園小 | 3年 | 岡 七海 |
| 苫小牧市苫小牧東小 | 3年 | 服部 虹太 |
| 函館市東山小 | 4年 | 佐藤 秀哉 |
| 札幌市宮の森小 | 4年 | 松田 莉奈 |
| 長沼町西長沼小 | 4年 | 矢内 凜 |
| 室蘭市八丁平小 | 4年 | 中居 陽夏 |

小学校(高学年)の部

| | | |
|-----------|----|--------|
| 小樽市緑小 | 5年 | 佐藤 成龍 |
| 小樽市稲穂小 | 6年 | 河田 咲 |
| 小樽市緑小 | 5年 | 小川 弓來 |
| 士別市士別小 | 6年 | 梶田 海月 |
| 函館市樞法華小 | 6年 | 佐々木雄哉 |
| 札幌市桑園小 | 5年 | 梅澤 衣咲 |
| 留萌市東光小 | 5年 | 南 咲良 |
| 遠別町遠別小 | 5年 | 遠見 汐弥 |
| 北斗市浜分小 | 5年 | 松永凜 汰朗 |
| 旭川市緑新小 | 5年 | 奥野 隼輔 |
| 室蘭市水元小 | 5年 | 三村 建成 |
| 旭川市陵雲小 | 5年 | 工藤 侑和 |
| 幕別町札内南小 | 6年 | 小熊 雛 |
| 苫小牧市苫小牧東小 | 6年 | 服部 彩芽 |
| 小樽市緑小 | 6年 | 笹原 悠生 |
| 函館市中の沢小 | 5年 | 井川 若菜 |
| 長沼町西長沼小 | 6年 | 近藤 涼 |
| 岩見沢市栗沢小 | 5年 | 北口 友結 |
| 札幌市幌西小 | 5年 | 綾部 茉莉子 |
| 森町濁川小 | 6年 | 伊藤 美秋 |

中学校の部

| | | |
|--------|----|-------|
| 滝川市明苑中 | 3年 | 木村 心 |
| 北見市北光中 | 3年 | 佐々木偉織 |
| 札幌市向陵中 | 2年 | 大浦 加純 |
| 札幌市向陵中 | 3年 | 川崎はるか |

| | | |
|---------|----|-------|
| 滝川市明苑中 | 2年 | 堤 まこ |
| 旭川市東光中 | 2年 | 矢萩 和 |
| 岩見沢市清園中 | 1年 | 佐藤ありさ |
| 札幌市向陵中 | 3年 | 日光 里歩 |
| 遺愛女子中 | 1年 | 大口 茉奈 |
| 岩見沢市光陵中 | 2年 | 佐藤那留采 |
| 小樽市西陵中 | 2年 | 北原 妃夏 |
| 旭川市北門中 | 2年 | 須藤 沙彩 |
| 岩見沢市光陵中 | 1年 | 島田 惇史 |
| 室蘭市本室蘭中 | 2年 | 大和田穂香 |
| 滝川市明苑中 | 3年 | 田家蒼乃依 |
| 岩見沢市緑中 | 1年 | 長井 駿太 |
| 滝川市明苑中 | 3年 | 柿崎 世奈 |
| 留萌市留萌中 | 2年 | 池田 恵梨 |
| 滝川市明苑中 | 3年 | 渡辺 泰江 |
| 音更町下音更中 | 1年 | 宇野 天那 |
| 美幌町美幌中 | 3年 | 水本 陽菜 |
| 室蘭市本室蘭中 | 1年 | 千葉めぐる |
| 遺愛女子中 | 2年 | 丸山 茉綾 |
| 北見市端野中 | 1年 | 桑原 萌衣 |

高等学校の部

| | | |
|-----------|----|-------|
| 札幌聖心女子学院高 | 1年 | 瀧田 小麦 |
| 札幌聖心女子学院高 | 1年 | 大久保絵未 |
| 札幌聖心女子学院高 | 1年 | 菊池 優花 |
| 札幌光星高 | 2年 | 嶋本 朱音 |
| 北海道土川高 | 2年 | 舟橋 和香 |
| 北海道留萌高 | 2年 | 年代 結香 |
| 北海道留萌高 | 2年 | 五十嵐雨音 |
| 北海道留萌高 | 2年 | 山方 未裕 |
| 北海道旭川東高 | 2年 | 後藤 開 |
| 北海道旭川西高 | 2年 | 三浦 七虹 |
| 北海道函館中部高 | 2年 | 平田 紗希 |
| 函館百合学園高 | 1年 | 中村 理加 |
| 北海道帯広柏葉高 | 2年 | 大久津 宝 |
| 北海道室蘭清水丘高 | 3年 | 八重樫佳代 |

北海道子どもの本のつどい～登別大会の報告

登別大会 実行委員長 須藤 和 恵

「北海道子どもの本のつどい登別大会」は、2016年7月30(土)から31日(日)の二日間日程で開催されました。歴史のある「子どもの本のつどい」の大会が、この登別で開催する事ができ本当に感動と感謝でいっぱいです。一日目は、小風さちさんをお招きして、「おはなしが生まれるまで」と題しての講演。小風さんのお人柄がうかがえるような、優しい声で語られることばの1つ1つが本当に心に沁みました。「赤ちゃんは、ことばをよく食べるんです。」と赤ちゃん絵本のことから始まり、幼年童話までを語ってくださいました。二日目は6つに分かれての分会です。第1分科会「学校図書館・公共図書館 登別の現場から」、第2分科会「ビブリオバトル」、第3分科会「アイヌ文化との楽しい出会いを」、第4分科会「読み聞かせ講座」、第5分科会「創作」、第6分科会「おはなしとわらべうたの部屋」と、登別らしさも交えた分科会を行うこともできたのではないのでしょうか。多くの方のお力を借りて開催できた大会でした。この大会を通して子どもたちへまた大人たちにも、「本」の楽しみを広げていく足がかりになることを願っています。

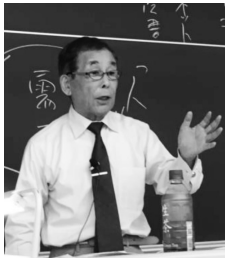


第58回北海道図書館大会

2016年9月8日(木)

第2分科会 「供給は需要を創る—「人」と「資料」を軸に考える—

講師：渡邊重夫氏(元藤女子大学教授)



講演概要

I. 「学校教育に欠くことができない」

1. 「学校教育に欠くことができない」の意義

学校図書館法は、学校図書館は「学校教育において欠くことのできない基礎的な設備」と規定している(第1条)。この規定は、学校図書館が戦後教育の所産として誕生したことと深く関わっている。

2. 戦後教育の所産としての学校図書館

今年は戦後71年、日本国憲法公布70年である。その戦後教育は、子どもを批判的精神に満ちた自主的・自立的存在として育てたいとの思いの中で出発をした。終戦の翌年(1946年)に『新教育指針』(文部省編)という文書が出された。その文書には、戦争の要因の一つは、日本国民が「批判的精神に乏しく権威に盲従しやすかったからだ」と記されている。そして文書はさらに、それゆえこれからの教育においては、「生徒が自ら考え自ら判断し、自由な意思をもって進むようにしつけることが大切である」と記している。こうした考えは、戦後の教師に価値観の転換を迫るものであり、学校図書館を生み出す母体ともなった。固定教科書に体现された「画一的価値観」からの転換を図るには、何よりも「多様な資料の存在」が不可欠である。学校図書館はそうした教育環境として位置づけられたのである。学校図書館の必然性であり、学校図書館が「学校教育に不可欠」な教育環境だという意義でもある。次に、この学校図書館の「不可欠性」を今日の状況と結びつけたいと思う。

に、それゆえこれからの教育においては、「生徒が自ら考え自ら判断し、自由な意思をもって進むようにしつけることが大切である」と記している。こうした考えは、戦後の教師に価値観の転換を迫るものであり、学校図書館を生み出す母体ともなった。固定教科書に体现された「画一的価値観」からの転換を図るには、何よりも「多様な資料の存在」が不可欠である。学校図書館はそうした教育環境として位置づけられたのである。学校図書館の必然性であり、学校図書館が「学校教育に不可欠」な教育環境だという意義でもある。次に、この学校図書館の「不可欠性」を今日の状況と結びつけたいと思う。

II. 学校図書館の今日的課題

1. セーフティネットとしての学校図書館

その第1は、学校図書館は子どもの学びと育ちの「セーフティネット」でもあるという点である。「子どもの貧困」が、大きな社会的問題となっている。家庭の経済的格差の拡大は、子どもの読書状況にも大きな影を及ぼしかねない。求める「本」を親から買ってもらえない、そのことは、子どもを貧困格差の連鎖に追い込みかねない。こうしたときこそ一層、学校図書館の出番が待たれているのである。どんな子どもにも、等しく求める本を手渡す、学校図書館の役割は旧来に増して大きくなっている。

2. 読書活動と学習活動の融合性

第2は、「読書」と「学習」との融合性についてである。学習指導要領(総則編)では、学校図書館の機能を「読書活動」と「学習活動」に分けて記述している。しかし、この両者はともに、「ことば」を介して知識や情報入手する営みである。この特質を思うなら、両活動は別個の活動であると同時に、「融合的関係」に立つ活動でもある。こうした捉えは、子どもの「学び」と深いかわりがある。豊かで確かな学力を身につけるにも、読書活動は重要である。それだけに、全ての子どもに平等に開かれ、利用される学校図書館を創り上げていくことが求められている。

3. どのように学ぶか—「学び方の学び」の重要性

第3は、「学び方の学び」と学校図書館との関連である。学校図書館界では「学び方の学び」は、長い間「利用指導」という用語が使用されてきたが、近年は「情報・メディアを活用する学び方の指導」と称されている分野である。しかし、こうした学習が成り立つためには、何よりも子ども自らが調べ、自らが納得して解決への道を発見する術を身につけることが不可欠である。そして、その学びのプロセスは、学校図書館の存在を内在化している。「学習内容」を豊かにするには「学習方法」のあり様が問われなければならないのである。近年大きな教育課題として登場してきた「アクティブ・ラーニング」(課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習)もまた、学校図書館機能の発揮を内在化している。

4. 社会参加の意識を高める

第4は、若者の社会参画、自己肯定感との関連である。「子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究」の結果によると、「読書活動が多い高校生・中学生ほど、未来志向、社会性、自己肯定、市民性などにおいて、意識・能力が高い」となっている。「読書」を媒介とした子ども・若者づくりは迂遠のようで、また成果は直ぐには見えにくいけれど、確実に子どもの「心」に変化をもたらし、意識を変え、行動様式を変えることにつながっている。その意味からも学校図書館の出番だと思う。学校図書館を通して、子どもに確実に「本」を届ける、そのことが子どもの意識を前向きに変え、主権者を育てていくことにもつながるのだと思う。

III. 「供給は需要を創る」

1. 「供給は需要を創る」(アーカート)

こうした学校図書館が抱えている今日的課題と関連させながら、「供給は需要を創る」というイギリスの図書館学者・アーカートの指摘を考えてみたい。供給者の行動様式が需要者の行動に大きな変化を及ぼすとの考えは、「サービス」における当然の原則である。この原則を学校図書館に即して考えてみると、「資料(本)」のあり様、「人」によるサービスのあり様、それらのあり様を変えることにより、利用者である子どもの変化を生み出すことができる、子どもの図書館満足度を高めることができるというのである。

2. 「図書館は成長する有機体である」(ランガナン)

インドの図書館学者・ランガナンは『図書館学の五法則』(1931年)のなかで、「図書館は成長する有機体である」と言っている。「新しい物質を取り入れ、古い物質を捨て去る」、そのことにより、図書館は「成長する有機体」としてあり続けることができるというのである。学校図書館もまた「成長する有機体」として、自らを変革の主体として捉え、発展・持続させることが大切だと思う。

3. 特に「資料」について

子どもにとっての学校図書館の利用体験は、「自分が通っている学校図書館の利用体験」に限られる。それゆえ、図書館への満足度が高くなくても「学校図書館はそういうものなのだ」と思うことがある。それだけに、個々の子どもの図書館満足度を高めたいと思う。その要は、資料と人のあり様である。特に学校図書館にとって、資料の問題は、有限な資料収集費という「壁」の問題でもある。しかし、少ない資料収集費は、子どもの資料入手に直結する。経済的弱者の立場におかれている家庭の子どもに対しては、より大きな差異をもたらしかねない。子どもの人間形成にも大きな影響をもたらしかねない。「学校図書館図書整備」(文科省)という問題をそうした視点から検討することも必要ではないかと思う。

4. 学校図書館にかかわる「人」について

資料の問題と人の問題は一体である。司書教諭、学校司書、これらの「人」の問題がさらに前進することは、供給側にある図書館サービスの質的転換をもたらす。学校図書館の開館時間もサービスもそして利用者数も、これらの「人」の問題(配置)と連動している。

5. 「地方」の問題—「いずれの読者にもすべて、その人の図書を。」

ランガナンは、その第二法則に「いずれの読者にも、すべてその人の図書を」という法則を掲げている。これを学校図書館に置き換えると、「すべての子どもに、その子どもの図書を」「すべての子どもに、学校図書館を」となる。地域の学校で育まれた〈知〉が、当該地域の未来を創る、地域の〈知〉が地域の人びとが住む町を豊かな魅力あふれる〈地〉へと変えていく、学校図書館は、そうした可能性を秘めている。それゆえ、どんな町に住んでいようとも、その地域の子どもの「その人の図書」が必要なのである。その地域の子どものニーズに合致した図書が必要なのである。「供給は需要を創る」、「いずれの読者にもすべて、その人の図書を」。この法則は今日のわが国の学校図書館を支える法則でもある。

学校図書館情報

◆第49回北海道学校図書館研修講座へ参加を

- ・日時 平成29年1月9日(月)～11日(水)
- ・会場 北海道立道民活動センター(かでの2・7)他
- ・講演 「アクティブ・ラーニングと学校図書館」
～学習指導要領改訂の動向を踏まえて～
帝京大学教育学部 教授
鎌田 和宏 氏
- ・講義・実習・討議・交流の充実した3日間
※詳しくは案内要項またはHPでご確認ください。

◆第44回中学生作文コンクール審査終了

各地区からの作品応募、審査協力ありがとうございました。「心、ふるえるとき」のテーマで、生徒数が減少する中、2万点を越える作品が寄せられました。引き続き、参加校数の拡大と応募数の増加を期待します。

中央表彰式 1月5日(木) 13:00～15:00
北洋銀行セミナーホール
(札幌市中央区大通西2丁目7番地)

- ・日胆地区: 1月11日(水) 13時開催
室蘭プリンスホテル4階(桃山の間)
- ・道南地区: 1月12日(木) 13時開催
函館北洋ビル8階ホール
- ・道東地区: 1月10日(火) 13時開催
北洋銀行釧路中央支店3階会議室
- ・道北地区: 1月6日(金) 13時開催
旭川北洋ビル8階ホール

◆第47回学校図書館賞にご応募を!

本賞は次の3区分。応募期間は各部とも2017年2月28日(当日消印有効) <詳しくは全国SLAのHPをご覧ください>

- 運動の部** (学校図書館運動の推進)
 - ・学校図書館運動(読書運動を含む)を積極的に推進し、全県、あるいはある地域の学校図書館を著しく振興させた業績を顕彰します。
- 論文の部** (学校図書館に関する著作・論文)
 - ・学校図書館(読書指導を含む)について体系的にまとめた著作・論文(博士・修士の学位請求論文は除く)で2016年3月1日以降に完成したもの。学校図書館研究および実践の発展に貢献した業績を顕彰します。
- 実践の部** (学校図書館の実践活動)
 - ・学校図書館の経営・運営、読書指導、情報活用能力の育成指導、読書推進活動などにおいて卓越した実践を展開し、学校図書館または子どもの読書の発展に貢献した業績を顕彰します。

事務局

事務局長 黒澤敏行(札幌市立琴似中学校校長)
TEL 011-611-1351
FAX 011-615-9617
事務局校 札幌市立平和通小学校
事務局次長 野村邦重
〒003-0027 札幌市白石区本通15丁目北3-1
TEL 011-863-0235 FAX 011-863-0265

Amenity B-Coat

本の破損や汚れを防ぎながら、抗菌効果を発揮するブックカバー「アメニティBコート」ポリプロピレンフィルムのため、燃焼時にも塩素ガスなど有害物質が発生せず、安心です。ご指定の上ご愛用ください。

キハラ株式会社

〒062-0035 札幌市豊平区西岡5条3丁目8-15
TEL (011) 857-3331
FAX (011) 857-5211

◆『ソニーヤのめんどり』

2016年6月出版 (くもん出版) 1400円+税

おとうさんから、3羽のひよこをもらったソニーヤは、毎日大切に世話をします。「わたしがおかあさんになってあげるね」3羽は立派なめんどりに育ちました。ところが、ある寒い夜、鶏小屋からの物音で目が覚めたソニーヤがかけつけると、



めんどりのい1羽がいなくなっていました。「きつねにさらわれたの? しんじやったの?」泣きつかれたソニーヤに、おとうさんは静かに話し始めました。「でもね、きつねにも わけがあったのかもしれないよ」……。命のつながり、親と子のきずなを物語る、美しい絵本です。

編集後記

本号は第62回青少年読書感想文全道コンクールの特集号です。全道各地から届いた読書感想文を読むことで、子どもたちの確かで豊かな本との出会いが感じられ、とても喜ばしく思います。日々ご指導に当たられている皆様のご尽力に敬意を表したいと思います。来年も、より多くの子どもたちの、読書感想文コンクールへの参加がありますことを祈念しています。

(編集: 杉本 操 村山 知成 野村 邦重)
大久保雅人 黒澤 敏行

ホームページアドレス
<http://sla.gr.jp/~hokkaido-sla/>